

# 経済学史学会ニュース

The Society for the History Economic Thought Newsletter

No.22

August 2003

## 幹事会報告

2003年5月23日(金)に同志社大学で幹事会が、続いて24日(土)に総会が開かれました。報告、協議事項などで承認され、決定されたことは以下の通りです。

- 『学会ニュース』第21号で報告した以降の退会者は、お亡くなりになった会員4名を含めて29名、入会が認められた新入会員20名、したがって5月24日現在の会員数は810名です。なお、入退会者名は「会員異同」を参照して下さい。
- 2002年度決算が2名の監事の監査を経て承認されました。2003年度の予算も承認されました。
- 第68回大会は、2004年5月29日(土)、30日(日)に北星学園大学で開催されます(開催校代表者・田村信一会員)。また第69回大会(2005年度)は大阪産業大学にお引き受け頂くことになりました。
- 新幹事・渡会勝義会員の病気理由による幹事辞任が承認されました。会則により補充はしません。
- 日本学術会議経済理論研究連絡委員会の後任委員として、深貝保則会員を幹事会で選出しました。
- 日本経済学会連合評議員として、的場昭弘会員、只腰親和会員が幹事会で選出、総会で承認されました。
- 日本学術会議会員候補として馬渡尚憲会員を2003年2月に推薦しましたが、その会員資格が承認されたことが報告されました。
- 学術振興会から本学会宛に推薦依頼のあった科学研究費補助金審査委員候補(理論経済学第1段1名、経済学説・思想史第1段2名、第2段1名)について、適当な会員を常任幹事会で選定した旨、幹事会で報告され、了承されました。
- 年報編集委員会、大会組織委員会、英文論集委員会、企画交流委員会、学会賞審査委員会から報告がありました。詳細は「各委員会報告」を参照して下さい。
- 第67回大会(同志社大学)は220名余の参加者を得て無事終了いたしました。同志社大学の会員のみなさまに感謝を申し上げます。
- 新たに北海道部会は江頭進会員、関西部会は近藤真司会員が部会幹事に就任しました。
- 出口勇蔵名誉会員、野口真会員、宮田千蔵会員、渋谷勝久会員がお亡くなりになりました。幹事会・総会后に、平井俊彦会員、安保則夫会員、芳賀守会員、米田康彦元会員のご訃報を受けました。併せて哀悼の意を表させていただきます。

2002年度決算		2003年度予算	
収入		収入	
会費	5,853,000	会費	6,224,400
年報売上	268,800	年報売上	200,000
年報広告掲載料	317,690	年報広告掲載料	300,000
文部科学省助成金	1,000,000	文部科学省助成金	1,200,000
利子収入	89	利子収入	1,000
大会報告集売上	0	大会報告集売上	10,000
臨時収入	443,356	臨時収入	130,000
刊行物売上	59,048	刊行物売上	50,000
収入合計	7,941,983	収入合計	8,115,400
支出		支出	
大会費	350,000	大会費	350,000
部会補助費	173,270	部会補助費	300,000
会議費	486,090	会議費	700,000
刊行物編集・発行費	355,430	刊行物編集・発行費	250,000
年報編集・発行費	3,220,724	年報編集・発行費	3,072,000
大会報告集印刷・郵送費	373,840	大会報告集印刷・郵送費	400,000
事務局費	828,498	事務局費	240,000
選挙管理費	238,125	選挙管理費	0
会員名簿印刷費	0	会員名簿・学会ニュース印刷費	620,900
センター費	849,932	センター費	990,000
経済学会連合会分担金	35,000	経済学会連合会分担金	35,000
事業費	273,060	事業費	250,000
予備費	282,341	予備費	300,000
支出合計	7,466,310	支出合計	7,507,900
純収支	475,673	純収支	607,500
前年度繰越金	5,028,140	前年度繰越金	5,503,813
次期繰越金	5,503,813	次期繰越金	6,111,313

## 各種委員会報告

### 年報編集委員会

- 1 2003年3月締め切りの投稿論文は6本でした。
- 2 『年報』43号は6月中に刊行の予定です。43号から5回連続で、新しい研究動向のシリーズ「日本経済思想史」がスタートします。執筆予定者は、小室正紀、三島憲之、藤井隆至、柳沢治、Laura Hein です。
- 3 少し遅いのですが、スキデルスキー『ケインズ伝』全3巻の論評を45号に掲載する予定です。執筆予定者は、平井俊顕、小峯敦、伊藤邦武です。
- 4 『年報』の機関購入にご協力をお願いします。現在、『年報』を購入している大学図書館はわずか58機関です。学会の活動を広く知っていただくとともに、学会誌の財政基盤を確立するためにも、会員の皆様が所属される大学の図書館にぜひとも『年報』を一部お備えいただくようご協力をお願いいたします。なお、一冊の価格は3,000円（年間2冊で6,000円）です。ご購入の際は、下記にご連絡ください。

学協会サポートセンター（担当：荒木節子）

231-0023

横浜市中区山下町 194-502

Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935

E-mail: KHB20710@nifty.ne.jp

（西沢 保）

### 大会組織委員会

1. 第68回大会（北星学園大学[札幌市]：2004年5月29日[土]・30日[日]）のための報告希望および推薦を募集いたします。関係書類は、7月上旬に会員宛にお届けする予定です。
2. (i)（企画交流委員会などと連携をはかりつつ (ii) 大会報告などへの外国人研究者の導入に柔軟に対処していくこと、ならびに国際会議への積極的な取り組みを考えていくこと、および(iii) 報告集のオンライン化を検討していくこと、が5月に開かれた幹事会（同志社大学）で合意されました。
3. 第69回大会（大阪産業大学）では、恒例により、フォーラム（3本）が設けられます。希望される方（組織者）は大会組織委員会あてに、9月23日（火）までにご連絡ください([hirai-t@sophia.ac.jp](mailto:hirai-t@sophia.ac.jp))。

（平井俊顕）

### 英文論集委員会

1 経済学史学会英文論集の第3巻は坂本達哉・前々編集委員長のもとで編集され、このたび刊行されました。*The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, edited by Tatsuya Sakamoto and Hideo Tanaka, Routledge, 2003 (£60.00, 215p.). 編者たちのご尽力に敬意を表するとともに、会員各位が是非ご購入くださるよう、お願いします。

2 英文論集の第4巻はマルクスを主題とし、内田弘・前編集委員長のもとで精力的に編集作業が進められています。

3 2003 年度より、英文論集編集委員会の委員が交替しました。五十音順に、植村邦彦、内田弘、姫野順一、深貝保則(委員長)、渡会勝義が委員で、任期は2年間です。従来は各任期の委員会ごとに1巻ずつの編集を担ってきましたが、下記のように英文論集編集委員会の役割が若干変わります。

- (1) 数年後から5年後程度の見通しのもとで複数の英文論集を立案し、執筆者グループを組織して並行して進める。各グループには委員会のメンバーのうち若干名が関わる。
- (2) 執筆グループは各巻の準備作業、執筆過程において、海外の研究者との議論を積極的に取り入れる。数名の外国人研究者が執筆者に加わることもありうる。

なお、英文論集の可能性をお考えの会員からの、編集委員会へのご提案を歓迎します。連絡は深貝宛 [fukagai-yasunori2@c.metro-u.ac.jp](mailto:fukagai-yasunori2@c.metro-u.ac.jp) でお願ひします。

(深貝 保則)

## 企画交流委員会

### 1. 雑誌創刊のお知らせ

Institutions and Economic Development / Istituzioni e sviluppo economico edited by Nicola De Liso and Cosimo Perrotta ?University of Lecce(Italy)創刊のお知らせが届きました。英語あるいはイタリア語で投稿可能です。照会は<http://www.dipe.unile.it/ise>。

### 2. 企画交流委員会の機能

前企画交流委員会による改革案で提起された「企画交流委員会に学会の中長期的問題を考える機能を加味」(「学会ニュース」20号に掲載)することを含めて、この委員会の機能を再検討することにしました。ご意見のある方は委員長、各委員までお知らせくだされば幸いです。

(栗田 啓子)

## 学会賞審査委員会

第66回全国大会総会(2002年10月26日:新潟大学)において経済学史学会研究奨励賞の創設、ならびに同賞を審査する学会賞審査委員会の設置が決定されました。これにもとづき幹事会にて学会賞審査委員会委員長が選出されましたが、委員長は代表幹事と協議のうえ、以下の会員に審査委員を委嘱しました。

(委員長) 熊谷次郎

(委員) 橋本昭一、馬渡尚憲、竹本洋、服部正治、平井俊顕、塘茂樹

2002年12月8日に第1回審査委員会が開かれ、研究奨励賞推薦募集要項、推薦書ならびに推薦理由書の書式、推薦依頼書、委員の任期などが審議決定されました。この決定にもとづき、『学会ニュース』第21号送付の際に募集要項、推薦書・同理由書を同封して会員に推薦依頼を行ないました。

委員の任期については、規程上は2年ですが、新設委員会の性質上、次期委員会への引き継ぎを配慮して、いわゆる半舷上陸形式をとり、馬渡、竹本、平井の各委員の任期は(実質)2002年11月~2004年5月まで、残りの委員は委員長も含めて、2002年11月~2005年5月までとしました。したがって第1回研究奨励賞の審査にあたる委員は上記7名(委員長を含む)ですが、第2回の審査の際にはこのうちの3名は新委員と入れ替わることになります。

第1回研究奨励賞の受付期間は2003年4月1日から9月30日までですが、若手研究者の優れた業績を顕彰し、研鑽の一層の励みとなるような著作物の推薦を是非お寄せくださるようお願い申し上げます。

本賞の規程と内規は『学会ニュース』第 21 号に収録されています。募集要項は下記の通りです。なお規程、内規、募集要項、推薦書と同理由書の書式など本賞に関する文書はすべて学会のホームページ (jsnet) でご覧になれます。

研究奨励賞に関する問い合わせは、以下にお願いいたします。

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学経済学部 熊谷研究室気付 経済学史学会学会賞審査委員会

Email: kumajiro@andrew.ac.jp

Tel: 0725-54-3131 (代)

Fax: 0725-54-3202

## 第 1 回経済学史学会研究奨励賞募集要項

1. 推薦者 (名誉会員も含む)、ならびに被推薦者はともに学会員でなければならない。1 人の推薦者が推薦できる被推薦著作物は 1 件とする。
2. 推薦対象著作物  
推薦の対象となる著作物は、以下の①②③のいずれかの 1 件でなければならない。著作物の出版地、ならびに使用言語は問わない。
  - ①著書 (単著)
  - ②論文 (学会誌掲載の論文、大学ならびに研究機関の紀要論文、共編著書における論文、博士論文で刊行済みのもの)
  - ③書誌的研究、翻訳、ならびにトランスクリプションの各著作物なお、共同執筆の著書 (章節の執筆者の特定がなされていない共著) の場合には、執筆者全員が満 40 歳未満でなければならない。またインターネット上の論文、ディスカッション・ペーパー、ワーキング・ペーパーは対象著作物とはならない。
3. 被推薦者資格  
2003 年 9 月 30 日 (推薦公募締め切り日) 現在における年齢が満 40 歳未満であり、過去 3 年以内に刊行された著作物をもつこと。
4. 推薦公募期間  
2003 年 4 月 1 日から 9 月 30 日 (郵便等の消印有効) まで。
5. 送付書類等  
推薦書、推薦理由書、ならびに推薦対象の著作物 3 部 (コピーも可。ただし 1 部は必ず現物であること)。
6. 送付書類等の送付先  
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学経済学部  
熊谷研究室気付 経済学史学会学会賞審査委員会
7. 受賞作品の発表ならびに授与式は 2004 年 5 月の北星学園大学での第 68 回大会において行う。
8. 審査結果は『経済学史学会ニュース』に公表し、その講評は『経済学史学会年報』に掲載する。

(熊谷 次郎)

## データベース小委員会

経済学史・経済思想史データベース（JSHETDB）は、オンラインで利用およびデータ登録ができます。学史学会のサイト内のデータベースのページに入って利用してください。

<http://society.cpm.ehime-u.ac.jp/shet/jshetdb/jshetdb.html>

この領域の論文や著書を公表された場合、忘れずに登録していただけるようお願いします。電子ファイルやメモ、あるいは現物によるデータ提供も歓迎しますので、それは京都大学八木研究室にご送付ください。なおその際、欧文タイトルがあるものは、それを付していただければ助かります。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学研究科 八木研究室内  
経済学史学会データベース小委員会 yagi@econ.kyoto-u.ac.jp

(八木 紀一郎)

## 日本学術会議経済理論研究連絡委員会

4月25日に会議が開催され、平成16年度科学研究費補助金の審査委員候補の推薦が議題にされました。科学研究費補助金の審査をする枠組みは昨年度から大きく変わり、従来は一つに統合されていた経済理論と経済学説・経済思想が2つに区分されました。話し合いの結果、経済学史学会からは、経済理論の分野に第1段委員候補として1名を、経済学説・経済思想の分野に第1段委員候補として2名を、第2段委員候補として1名をそれぞれ推薦することが決まりました。

(千賀 重義)

## 日本経済学会連合

日本経済学会連合の平成15年度第1回評議員会が、5月26日午後6時より早稲田大学、商学部大会議室で開かれた。議事の内容はおおむね以下の通りである。

### I 報告事項

- 1 平成15年度国際会議派遣補助第1次審査では該当者がいない旨、報告された。
- 2 平成15年度外国人学者招聘補助第1次審査では、日本物流学会、経済地理学会に2名の該当者があった旨、報告された。
- 3 平成15年度学会会費補助第1次審査では、日本商業学会、日本経済学会の2学会への補助が報告された。
- 4 『英文年報』第22号は昨年12月に刊行され、23号も今年の12月に刊行予定であることが報告された。
- 5 『連合ニュース』39号が5月上旬刊行された旨、報告があった。
- 6 日本学術会議の会員や役員の選出方法等の改革案が取りまとめられたが、第19期会員選挙は従来通り行われる旨、報告された。
- 7 IEA (International Economic Association) の第13回大会が2002年9月にリスボンで開催され、次期大会がブラジルまたはオーストラリアで2005年に開催される予定であることが報告された。

## II 審議事項

- 1 平成14年度決算、平成15年度予算案がともに承認された。
- 2 進化経済学会、労務理論学会の連合加盟が承認された。
- 3 平成15年度事業計画案が提案され承認された。

(只腰 親和)

## 会員異動

### 1. 退会者 33名 (2003年7月現在。幹事会・総会時点 29名 (うち物故退会4名))

Web版では省略。

### 2. 新入会員 20名 (2003年5月23日承認)

Web版では省略。

### 3. 住所等変更 (会員名簿をご覧ください)

## 部会活動

### 北海道部会

第7回研究報告会

日時：2002年12月14日(土)午後2時より

会場：北海学園大学4号館10階第2会議室

参加者：13名

1. The Immanence of the Invisible Hand  
橋本 努 (北海道大学)
2. シルビオ・ゲゼルの「資本主義」批判  
相田 慎一 (専修大学北海道短期大学)

The Immanence of the Invisible Hand

橋本 努

アダム・スミスの「見えざる手」を現代の市場経済の論理として捉える場合、どのような解釈が可能であろうか。本報告では、スミスにおける「見えざる手」の三つの用法を整理したうえで、その概念がもつ論理の構造を、現代の分析哲学の知見に基づいて検討した。現代における「見えざる手」の解釈として、一般均衡理論における「見えざる手」の解釈、オーストリア学派のミーゼスやロスバードにおける原理的功利主義の観点からの理解、ハイエクによる

自生的秩序の観点からの理解、という三つの理説がある。報告ではこれら三つの理説を検討したうえで、これらとは異なる説を提示した。それは「超越性」に対比される「内在性」の観点からの把握であり、「内在化」による秩序の生成という問題に論理的な説明を与えるものである。政策論的な含意としては、市場を自生的秩序としてとらえるのではなく、「自生化」という作用の観点から市場のメカニズムを動態的に運営するという問題に、光を当てている。

シルビオ・ゲゼルの「資本主義」批判

相田 慎一

本報告は、「地域通貨」の思想的源流であるシルビオ・ゲゼルの「資本主義」批判の基本的構造とその特徴を、彼の主著『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』第四版(1920年)や『搾取の原因とそれとの闘争』(1922年)などの検討を通じて明らかにすると同時に、マルクス経済学の「資本主義」批判との比較を試みようとするものである。

ゲゼルの「資本主義」批判の理論的前提は、貨幣の本質＝交換手段論である。こうした観点から彼は、現行の貨幣は、1. 蓄蔵を許す貨幣、2. 鈍足な貨幣、3. 利子を要求する貨幣であると認識する。

とりわけ彼の「資本主義」認識にとって重要なのは、3.の貨幣利子の問題である。彼によれば、商品（供給）が時間の経過とともに「老化」してゆくのに対し、貨幣（需要）は時間が経過しても「老化」することがない。したがって、前者が交換を「待てない」のに対し、後者は交換を「待つことができる。」こうした交換における立場の相違が商品と貨幣の関係を「不等価」（「貨幣特権」）にし、貨幣の使用料としての「基礎利子」（ $G-W-G'$ ）が生じると彼は考えるのである。

そしてこの「基礎利子」が工場、家屋、船舶などの「実物資本」の「収益性限界」になって、「資本主義」を「利子経済」化させるとというのが、ここでの彼の基本的主張なのである。

このようにゲゼルの「資本主義」観は、「資本主義」の本質を「産業資本主義」に求めるマルクスのそれとは異なり、「資本主義」の本質を「利子経済」に求めるものであった。またその批判も、生産手段の私的所有の廃棄を解決策とみなすマルクスとは異なって、「競争原理」「個人的自由」「労働全収益権」という三つの原理を基礎とする「自然的経済秩序」（自由経済社会）の構築とそのための「自由通貨」（スタンプ貨幣）の導入にその解決策を見出そうとするものであった。

## 東北部会

### 第24回例会

日時：2003年4月26日（土）13：30～

会場：東北学院大学土樋キャンパス 8号館第1会議室

参加者：13名

#### 1 J. アンダソンの伝記的記述について—シートン文書等から—

菊池壮蔵（福島大学）

#### 2 イギリス在外研究報告—LSEとPROの資料をめぐる—

小峯敦（新潟産業大学）

#### 3. リカードとケインズ—セイ法則の問題構成をめぐる—

福田進治（弘前大学）

#### J. アンダソンの伝記的記述について—シートン文書等から—

菊池壮蔵

ジェイムズ・アンダソンの名は、主として差額地代論の先駆者として知られている。とはいえ、その生涯を通じての彼の活躍範囲は広く、18世紀後半のスコットランド経済発展過程のなかに深く関わっていたことは徐々に明らかになってきている。しかし、これまでの彼の伝記的記述はほとんど定型なもの域を出ず、その広い業績の中から今日知られているものも限られているように思われる。一般的な伝記的記述は、D.N.B., プレンターノ[1893]が知られているが、彼の追悼文が掲載された1808年のGentleman's Magazineの記述には、『ブリタニカ百科』への執筆などの記述はあるが、彼の「地代論」に関わる文章は無い。それが登場するのはマカロック[1845]によるリカード地代論の先駆者という紹介からであって、その後、マルクスからシュムペーターに至るまで様々に言及されてきた。わが国で最も詳細にアンダソン地代論書誌の確定に努めた加用信文は、同時代の同性同名者との混同を根拠に、プレスターノが掲げていたアンダソンの著作リストの幾つかを排除していたし、バンタムとの交流なども怪しいとしていた。

しかし、昨年調査することが出来たアバディーン大学が所蔵する「シートン文書」は、アンダソン最初の結婚（婿入り）相手の実家 Mounie の Seton 家の子孫が1970年に寄託したもので、そこには、アンダソンに関わる包括的な書類が含まれていたが、北米植民地、石炭税、西部諸島の漁業振興策（バンタムとの確執の原因）等に関わる諸資料が存在しており、彼の生涯にわたる幅広い活動を示すものであった。また、Aberdeen 大学の名誉博士号の授与は、Marischall College 卒業生名簿により1780年ではなく1782年であることも確認された。

#### イギリス在外研究報告—LSEとPROの資料をめぐる—

小峯敦

1年間の在外研究の間、イギリスのエクスター大学 University of Exeter を拠点とした。大英図書

館（本館および新聞館）・公文書館（政府文書）・LSE（ベヴァリッ ジ文書、パスフィールド文書）・オックスフォード大学（修論・卒論）などを歴訪した。興味を中心は、経済学者の政府機構での役割、職業紹介所と失業保険、ベヴァリッジとケインズ・ピグー等の個人的交流などである。

本日の発表では、この中から LSE と PRO の文書を無作為に紹介し、経済思想の観点から注釈を付けた。まずベヴァリッジ文書の中から特に私信を集めた。ラウントリー・ケインズ・ピグー・ウェッブ夫妻・ヘンダーソン・ロビンズ・チャーチルを取り上げた。これらの文通を通じ、イギリスの戦間期において、ベヴァリッジがいかに思考し行動していたかを跡づけることができる。次に PRO で集めた資料（職業紹介所設立や ホールデン委員会）を実際に開示した。また上記文書の引用許可にも触れた。最初 LSE に許諾を求めたところ、ベヴァリッジに手紙を送った者へ、改めてその許可を取るようにと示唆された。ケインズの文書はキングズカレッジが一括管理しており、出版物・未公開文書いずれも、必ず引用許可を求めよという指導を行っている（半月ほどで許可された）。ただしピグーやラウントリーの場合は、私信などは取り扱わないと出版物の著作権保有者から回答された。イギリスの教授にこの事情を相談したところ、「著作権保有者を捜す努力をした」と論文の中で断ればいいのではないかと助言された。

多くの英語文献には最初に膨大な謝辞 acknowledgements が付いている。その中には図書館員に感謝すると共に、引用許可への感謝も綴られている。こうした面で、未公開文書を発表に利用する場合は、細心の注意が必要であろう。

### リカードとケインズ—セイ法則の問題構成をめぐって—

福田進治

ケインズはリカードを批判しながら、セイ法則の成立を否定したのだったが、ケインズによるリカード批判の論理は必ずしも明らかでない。そして現在のマクロ経済学のテキストの多くでは、セイ法則の成立の条件は、市場の調整機能との関連では価格が伸縮的であることとされ、ワルラス法則との関連では貨幣需要が一定であることとされている。いまや

経済学の世界では、セイ法則の問題は曖昧なままで、マクロ経済学の視点はあまり重要でないかのように見える。こうした状況を踏まえて、リカードとケインズによるセイ法則に関する議論を再検討し、セイ法則の問題構成を再確認することを試みた。

セイ法則の成否に関する問題は「市場の均衡」と「収支の均衡」という2つの問題から構成されている。すなわち経済全体のすべての個別商品の需給一致の条件は、第1に個々の商品の市場における需給調整が滞りなく行われること、第2に個々の経済主体がつねに収入のすべてを支出すること、または経済全体の総収入と総支出が等しいことである。このうち収支の均衡の成立は、総需要と総供給に関するマクロ経済均衡の問題に相当するだけでなく、市場の均衡に関する議論が成り立つための前提条件でもある。

こうしたセイ法則の問題構成は、リカードが資本蓄積の議論において定式化したものであり、ケインズはリカードのセイ法則に関する議論の枠組みを事実上継承しており、そのうえで収支の均衡の成立を否定し、セイ法則の成立を否定したのである。ここでリカードとケインズの両者にとって、セイ法則に関する議論の強調点は、市場の均衡の問題とは明らかに異なる収支の均衡の問題にあり、そこにマクロ経済学の固有の問題が見出された。しかし新古典派総合では、ケインズの議論は市場の均衡の問題の枠組みの中に押し込まれたのであり、その影響は今日の経済学の世界にも尾を引いている。

## 関東部会

### 第2回部会

日時：2002年12月14日（土）

会場：立教大学12号館第1・2会議室

参加者：45名

テーマ：竹本洋・大森郁夫編『重商主義再考』（日本経済評論社、2002年）合評会

報告者：田中秀夫（京都大学） 深貝保則（東京都立大学） 柳沢 治（明治大学）

報告要旨は『経済学史学会年報』第43号 Notes and Communications に掲載されます。

### 第3回部会

日時：2003年3月28日(土)

会場：立教大学12号館第2会議室

参加者：17名

1. 社会主義経済計算論争の再生から現段階へーD・ラヴォア『代替的解釈』の批判的検討ー塚本恭章(東京大学大学院経済学研究科博士課程)
2. オスカー・ランゲの経済サイバネティクス論土井日出夫(横浜国立大学)

#### 社会主義経済計算論争の再生から現段階へーD・ラヴォア『代替的解釈』の批判的検討ー塚本恭章

社会主義の合理的存立可能性をめぐるミーゼス、ハイエクとランゲ、ラーナーらとの間で戦われた社会主義経済計算論争は、1985年刊行のドン・ラヴォアによる Rivalry and central planning を契機として現代的に再生され、オーストリア学派の「敗北」という従来の判定は抜本的修正を施された。しかしソ連邦崩壊後もなお代替的な社会主義システムの実現可能性を積極的に模索する論者が多数存在する。その意味で本論争は依然として「継続した営み」であり、その理論的・思想的含意をより明確化しなければならない。こうした問題意識に基づき、本報告ではラヴォアの議論を批判的に再検討し、これからの経済計算論争の研究の方向性を示唆した。「社会主義」を検討対象とすることが結果的に「市場」の理解を深めることになった本論争は、「学派」の方法論的独自性を洗練化する教練場でもあった。オーストリア学派は新古典派の静学的均衡状態としての完全競争概念に代わり、複数の経済主体間における企業家的な対抗的競争を通じての知識の創造・発見的プロセスとしての市場認識を強調した。このような洞察は、ブルスやコルナイら東欧改革派に市場社会主義システムの内的不整合性という自省的総括を迫るものとなった。90年代以降の新たな論争状況では、ハイエクらオーストリア学派の社会主義批判に応え、市場社会主義概念の再定式・u 枢サという挑戦課題に取り組む分析的マルクス主義者ローマーらの存在が目される。ローマーによれば、社会主義とは生産手段の公的所有という制度的構造ではなく、「機会の均等」を意味する一種の平等主義と

して理解される。社会主義の再定義という問題を含め、ラヴォアの再解釈ではほとんど検討されていないマルクス学派の貢献及びその社会主義論との関連性を問い直しながら、社会主義経済計算論争の学説史的展開をトータルに描き出すことが要請されている。それはまた、「代替的解釈」それ自体の自己革新を担う作業でもある。

#### オスカー・ランゲの 経済サイバネティクス論

土井日出夫

1930年代の社会主義経済計算論争において、ミーゼス、ハイエクの計算不可能論に対抗し、体系的に計算可能論を展開して敢然と社会主義を擁護したのが、若き日のオスカー・ランゲであった。しかし、戦前彼が理論的に守り、戦後は祖国ポーランドで実践的に発展させようとした「社会主義」は今はない。逆にかつての論敵ミーゼスとハイエクの思想は不死鳥のようによみがえり、世界を席卷している。「勝負」はあったようにみえる。だが果たして本当にそうだろうか。

本報告は、戦後ランゲが積極的に展開した経済サイバネティクスの構想をとりあげ、その批判的継承の可能性を探ったものである。

まず、サイバネティクスの主要な問題領域であるシステムの調整と制御のプロセスを、経済現象に見いだそうとするランゲの試みそのものについては、多くの制御工学の専門家も認める発想であり支持できる。しかし、ランゲの経済サイバネティクス論には重大な問題点が2つある。

一つは、本来のサイバネティクスにおける「伝達関数」の概念を誤解し、誤って用いていることである。本来の「伝達関数」は「ラプラス変換された領域における出力信号と入力信号の比」であり、ラプラス変換された領域(s領域と呼ばれる)になければ意味がない。ところがランゲは、その意味のない、ただの数の比を「伝達関数」と称しているのである。

二つ目は、本来のサイバネティクスにおける「フィードバック」概念も誤って理解していることである。本来の「フィードバック」とは、危険を避ける

ために、操作どおりに鉄道のポイントが切り替わったかどうかを、わざわざ指令塔に伝えるような行為を指す。この「危険回避」のファクターがランゲの「フィードバック」概念には欠けているのである。

以上の2つの問題点は、逆に考えるならば、経済サイバネティクス論を「再生」させる契機と見ることもできる。すなわち、ラプラス変換を用いて動学的定式化を行い、かつ危険回避のファクターを組み込むならば、経済サイバネティクス論は現代でも通用しうるのではないだろうか。

## 関西部会

第143回例会

日時：12月7日（土） 13:00-16:45

会場：福井県立大学

参加者：15人

### 1. 協調問題の変遷—マネタリズム論争以降のマクロ経済学の焦点

広瀬弘毅（福井県立大学）

### 2. J. スチュアート『ドイツ鋳貨論』における理論とその射程

奥田聡（大阪経済大学）

### 3. アダム・スミスとジェイムズ・スチュアート—ロスのスミス伝を手がかりに

渡辺邦博（奈良産業大学）

### 調整問題の変遷 —マネタリズム論争以降の マクロ経済学の焦点

広瀬弘毅

マネタリズム論争以降、新しい古典派経済学の攻勢の前にケインジアンは以前の勢いをなくしてしまったように見える。これは、この論争の焦点が価格硬直性の有無に還元されてしまったからであろう。たしかに、現在比較的元気のあるニュー・ケインジアンは個別経済主体の合理的行動から価格硬直性を導き出すことに成功した。もちろん、これをマクロ経済理論の一つの進展と言うことも可能であろう。

しかし、彼らのアプローチはもともとケインジアンが持っていた問題意識を引き継いでいるとは言えない。

改めて言うまでもなく、ケインズは価格硬直性による失業の発生を拒否していたのであり、彼が重点を置いたのは「貯蓄と投資の調整問題」であったはずだ。これは、レイオンフーヴッドがヴィクセル・コネクションとしてかつて整理した論点であり、不確実な将来に関わる経済主体間の調整がうまく行われるかどうかを問うものである。もちろん、実物的景気循環理論を持ち出すまでもなく、新しい古典派経済学は、異時点間の効用最大化を行う経済主体を考察しているのであり、将来にわたる意思決定を分析している。しかし、新しい古典派経済学の異時点間調整の扱いでは、投資の主体と貯蓄の主体が同じになってしまっており、異なる経済主体が異なる市場で活動することによって調整をしなければならないと言う事情を全く取り扱えていないのである。そして、このような事情はニュー・ケインジアンでも同じである。

たしかに、ホーウィットが指摘するようにケインズはこの問題に対する適切なモデル（寓話）を提示し損なったかもしれない。しかし、それは問題意識が適切でないこととは別である。1970年代以降のマクロ経済学の変遷を見る際に、技術的な革新だけでなく、問題意識の変化も辿っていく必要がある。

### J. スチュアート『ドイツ鋳貨論』 における理論とその射程

奥田 聡

本報告では、J. スチュアートの『ドイツ鋳貨論』（1761）を著作集版に基づき、その理論構造を分析するとともに、『原理』（1767）との若干の比較を行い、『ドイツ鋳貨論』での複本位制下での金銀比価変動に対する不変の計算貨幣の定式化がより厳密なものであることが示される。

まず、スチュアートの基本姿勢として、国際的複本位制下での貨幣・鋳貨政策への基礎理論を意図している点を、為政者と思索家の区別、計画提案意図の無い思索家の立場などの例示により明確にする。その上で、相対的価値概念、計算貨幣と素材的貨幣

概念、欧州貨幣の混乱要因としての複本位制下における本位規定の問題の認識、政策の原則として金銀の市場比価に応じて新鑄造と通用価値を変更し、運用上で各地に裁量権を付与すべきとの主張などを理論の前提として明示する。

次いで、中核である複本位制下での不変の計算貨幣論として、法定比価と市場比価の幾何平均 (geometrical proportion) による通用価値変更の定式と数値例を示し、ステュアートの数値例はその定式により一般的に成り立つことが論証される。また近似としての算術平均と幾何平均との差の数値例とその計算が明示される。その他計算貨幣価値変動の影響や鑄造料の賦課についての考察が示される。

第3に、複本位制への対応としてのマーシャルの合成本位論と比較し、マーシャルの理論が金銀のウェイトを任意とした、リカードの金塊兌換の複本位化であるのに対し、ステュアートの「幾何平均」を市場比価に応じてウェイト付けられた複本位制での不変の計算貨幣と、「算術平均」を基準時点の比価でウェイト付けられた合金本位と位置づけた。

最後に、『原理』初版、著作集版との比較を行い、初版での「算術平均」の定式化の誤りと、その認識に基づく著作集版での改訂された数値例が『ドイツ鑄貨論』の「算術平均」と同一のものである点が明らかにされる。

#### アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート — ロスのスミス伝を手がかりに —

渡辺邦博

本報告は、『アダム・スミス伝』を、「ジェイムズ・ステュアート研究」の素材としようとする点で、薬物の目的外使用のようなことをやろうとするものである。

有名なジョン・レイの『アダム・スミス伝』(1895年)にとって代わるものとして1995年に公開されたイアン・ロス『スミス伝』は、前者を圧倒的に上回る情報量を提供していて、スミス研究にとって豊富な材料を提供しているものと思われる。本報告では、このロスのスミス伝を、アンドルー・スキナーによる新しいステュアート伝 (Introduction section I: Biographical, in *Sir James Steuart's Principles of Political Oeconomy*, edited by A.

Skinner, London, 1998.) と対比しながら、ステュアート研究に活かせる諸側面を探ろうとしたものである。小林昇が判断したように、ステュアートとスミスは、同時代人でありながら、両者の個人的接触が、ほとんど見られない珍しい事例である点は基本的に正しい。

しかし、今回ロスのスミス伝をひもといてみると、両者の少なくない個人的・理論的接触の形跡が窺われる。たとえばスミスのグラズゴウ大学就任に際して人事に携わったメンバーは、ステュアートの関係者でもあったし、1760年代初頭のいわゆるスコットランドの金融為替危機に際しては、最近の研究によって明らかなように、両者の銀行理論がほぼぜり合いを行ない、スミスのそれが勝利したとの結論も得られている。

報告者は、ヒューム、ステュアート、スミスが、異なる旅程を経ながらではあるが、同時代人としてかなりの程度、個人的・理論的な接近が発生した可能性を、三者が比較できる年表を使用しながら、探ろうとした。

さらに、報告者が作成したステュアートの家系図を提示して、ロスのスミス伝に出現しても、各種の人名辞典では探れないステュアート関係者を探索する重要資料として、いわゆる『コルトネス・コレクションズ』(1842年)と『コールドウェル文書』(1854年)を紹介して、その研究上の重要性を強調した。

## 西南部会

### 第94回例会

日時：2002年12月7日17:00~17:30

場所：九州産業大学経済学部中会議室

出席：23名

1. アダム・スミス同感論の基本的構造について  
— 「公平な観察者」、「良心」、「一般諸規則」をめぐる水田洋、田中正司氏の見解の相違 —

寛 義敏 (九州産業大学大学院経済学研究科)

2. 景気加速と需要法則：J. M. クラークのケインズ理解について

山崎 好裕 (福岡大学経済学部)

3. J. S. ミル『経済学原理』における交換論の位置について

諸泉俊介 (佐賀大学)

アダム・スミス同感論の基本的構造について  
—「公平な観察者」、「良心」、「一般諸規則」  
をめぐる水田洋、田中正司氏の見解の相違—

寛 義敏

スミス『道徳感情論』の全体構造を知るうえで、同感論の基本構造、特に公平な観察者、良心、一般規則を理解することが有用と思われる。そこで、水田洋、田中正司両氏の見解を基にこれらを検討する。

水田氏の解釈では、公平な観察者は当事者ではない観察者であり、「利害関係のない人物とほぼ同義的に使用される」。また一般規則は相互関係の中で同感を繰り返すことから自然に発生する。したがって、一般規則は、相互同感の経験から導き出された適宜性の集合にほかならない。氏の解釈では、良心は一般規則が内面化したものにほかならない。一般規則は互いに見知らぬ個人間の経験の中から自然に形成されていき、良心も一般規則と同様に自然に形成される。こうして市民社会はおのずと存続するというものである。この理解は、市民社会存続の本性を念頭に置き、市民社会の現実的な規則が、個人間の経験から自然に形成され、存続する次第を明らかにしたものと考えられる。

他方、田中氏は、この公平な観察者を大河内一男、高島善哉両氏以来の「行為者—被行為者間で公平な」観察者として捉える。氏は、スミスが人間を自分本位なものとして捉え、公平な観察者の同感を現実的な行為の判断原理としてだけでなく、行為者の自制を担うものとして、導入したと考える。さらに、スミスは、観察者視点を良心として一人称化することにより、市民社会を担う主体の倫理の確立を試みたが、内なる観察者も「不完全な普通の人間」にすぎない。そこで、良心の自己偏愛性克服のため、一般規則を導入し、それにより、より公平な観察者の視点が確立されていく論理を展開したとする。したがって、田中説での良心と一般規則とは、その公平性の度合いにおいて違いがあり、一般規則のほうがより公平なものとして解される。以上、氏の解釈では、スミスは、観察者視点を良心として一人称化することで、市民社会を担う主体の倫理の確立を試みたが、他方で、市民社会がおのずと存続するには、人間の

自己偏愛性が強いいため、その克服原理として一般規則を導入した、とされる。

景気加速と需要法則：

J. M. クラークのケインズ理解について

山崎 好裕

クラークは「昨今の経済学者の諸分岐」と題する論考 (American Economic Review. Vol. 37, No. 2, May 1947) の中で、ケインズ革命を「(経済学の) さらなる革命への序曲」と位置付けている。そこで彼は、価格や賃金の市場での決定にその分析の焦点を当ててきた限界主義学派の時代は終わり、より広い社会的な背景を考慮に入れた「有機的集団の経済理論」を構築すべきであるとした。ケインズが同じスタート地点からマクロ的因果関係の解明へと進んだのに対して、自らはより社会改良的な方向を目指したのである。

同じ論考でクラークは民間投資のインセンティブを高めることを経済政策の重要な機能と考えない経済学者たちを批判し、その中で投資の決定要因に消費支出をあげる考え方や利子率をあげる考え方を区別した。後者がケインズ理論とすれば、前者はクラーク自身が行った加速度原理に関する最初の議論と考えられる。ドーフマンがクラークの『アメリカ人の対戦コスト』のリプリント版序文で指摘したように、クラークとケインズとは N. A. L. J. ヨハンセンの乗数と過剰生産に関する考察から同じように影響を受けて自らの理論を形成したのであり、そのことをクラーク自身も十分に自覚していたふしがある。

クラークは論考「景気加速と需要法則—景気循環の技術的要因」(The Journal of Political Economics, Vo. 25, No. 3, March 1917) で、現在の国民所得ではなく消費支出を独立変数とする加速度原理を定式化していた。クラーク自身は制度派的な実証主義に基づき、完結したモデルを完成してはいないが、加速度原理が景気循環を生み出す技術的な関係と彼が「法則」と呼ぶ消費財需要と生産財需要の間の論理的関係とを明確にしていた。クラークの加速度原理は経済に内在する技術的なメカニズムであり、ケインジアンのように企業者の意思決定を媒介にした投資関数とは見なされていない。しかし、

乗数的な消費需要の決定を補うことで完結した景気循環モデルを構築できる十分な水準に達していたのである。

### J. S. ミル『経済学原理』における 交換論の位置について

諸泉俊介

J. S. ミル『経済学原理』の特徴の一つに分配論と交換論との峻別論がある。ミルは、リカードウとは異なり、分配論を実物的に説いてこれを交換論の前に位置づける。本報告の目的は、この峻別論の含意をミル利潤論の検討を通じて探ることにある。

『試論集』でミルは、「労働の生産力」に基づく利潤の説明と「資本の生産力」に基づく利潤の説明とを本質と外観として区別し、この区別を以ってリカードウ利潤論を整理・修正する。ミルは、リカードウの相反命題における賃銀を「賃銀の生産費」と捉え直した上で、リカードウ命題の難点として、先行資本の利潤の存在を摘出する。ミルは「賃銀の生産費」によって「労働の生産力」に基づく利潤と「資本の生産力」に基づく利潤との間に理論的整合性を

とるが、同時に、二つの利潤規定の現実的な乖離の可能性を暗示する。

これを受けて、『経済学原理』の分配論においてミルは、資本を社会的・全体的資本と想定することで、諸資本の交換から生じるこの現実的乖離を封殺して利潤を説くが、それと同時に資本の節約・貯蓄によって、労働の生産力に変化がなくとも、現実的利潤は変化しうることを指摘する。その際、この二つの論理次元を結ぶのが「遊休資本」の概念である。ミルは、この遊休資本の動向を、逆に言えば資本の生産力として現れる現実的な利潤を定める機能資本の量的規定とその動向とを、交換・貨幣・信用を展開する交換論に委ねた。

ミルは、分配論において、利潤を労働の生産力に基づかせて、社会の再生産と発展の基礎条件を捉えた。しかし彼は同時に、資本関係という特殊な生産様式においては、この利潤が現実的な利潤と乖離する可能性を指摘し、その現実的な態様を、交換論に位置づけた。かくしてミルの交換論は、分配論から分離されて後方に置かれたものと考えうる。

## 国際学会

### 国際学会開催予定

開催日時を基準として、最小限の情報を掲載しています。募集や参加などをすでに締め切ったものもあります。

最新の情報については Economic History Services (<http://www.eh.net/HE/>), History of Economics Society (<http://www.eh.net/HE/HisEcSoc/>) などをご参照ください。

●3 - 5 September 2003

U. K. History of Economic Thought Conference,  
University of Leeds

<http://www.eh.net/lists/archives/hes/jan-2003/0003.php>

●19-21 September 2003

2003 Economic History Association Meeting,  
Hilton Suites, Nashville, Tennessee

<http://www.eh.net/EHA/meeting/index.html>

●25 - 27 September 2003

Charles Gide Association, Grenoble, France

[http://www.charles-](http://www.charles-gide.association.org/journees_etude.htm)

[gide.association.org/journees\\_etude.htm](http://www.charles-gide.association.org/journees_etude.htm)

<http://www.upmf-grenoble.fr/cepse/>

●3-5 January 2004

The History of Economics Society, 2004 Winter  
Sessions, San Diego, CA

[http://www.eh.net/HE/HisEcSoc/carchive/cfp\\_assa2004.shtml](http://www.eh.net/HE/HisEcSoc/carchive/cfp_assa2004.shtml)

●26-29 February 2004

The Eighth Annual Conference of the European  
Society for the History of Economic Thought,

Venezia and Treviso  
<http://helios.unive.it/~eshet/>

●2-4 April 2004

Economic History Society Annual Conference,  
University of London

<http://www.ehs.org.uk/society/annualconference.s.asp>

●23-25 April 2004

History of Political Economy Conference (HOPE  
2004), Duke University

E-mail:pboettke@gmu.edu

or smedema@carbon.cudenver.edu

●25-27 March 2004

Ninth Annual European Conference on the History  
of Economics (ECHE 2004), University of Reims  
Champagne Ardenne

E-mail:a.marciano@wanadoo.fr

●10-13 June 2004

Second International Conference on Economics and  
Human Biology, Munich, Germany

<http://www.econhist.de/ehb/conference/index.html>

●17-20 June 2004

17th Heilbronn Symposium in Economics and the  
Social Sciences Veit Ludwig von Seckendorf  
(1626-1692), Heilbronn, Germany

E-mail:juergen.backhaus@uni-erfurt.de

●8-10 July 2004

5th International Utopian Studies Conference,  
University of Oporto, Portugal

<http://www.geocities.com/uss2004/>

●21-25 August 2006

14th International Economic History Congress,  
Helsinki, Finland

<http://www.valt.helsinki.fi/yhis/iehc2006/>

(赤間 道夫)

## 追 悼

### 出口 勇蔵 名誉会員

本学会の名誉会員である出口勇蔵先生（京都大学名誉教授）は2003年4月2日享年94才でおなくなりになりました。出口先生が1943年にご上梓された『経済学と歴史意識』は、ウェーバー、チュルゴー、コンドルセ、J・S・ミルにおいて歴史意識と方法論の関連を探求されたもので、戦時下に生まれた名著の一つです。その後、先生はウェーバー研究を深められるとともに、京都大学で多くの研究者を育て、また経済学史と社会思想史の学問としての確立に尽力されました。本学会への貢献もその一つで、創設時の会員であったばかりでなく、1968年から1972年の多難な時期にかけて代表幹事を勤められました。

先生の学風は、師とされた石川興二教授を経て河上肇に遡り得るもので、合理主義を是とする他の戦後派の研究者とは異なるものでした。晩年の先生の警咳に接して思うことは、先生は戦時期以来、歴史意識の深さを問い続けて来られたということです。先生にとってディルタイは最後まで生きていましたし、また歴史学派もウェーバーに克服されただけの存在ではありませんでした。たしかに、私自身、先生のウェーバーに対する批判が、当時多く見られたマルクス主義者の批判に和したものに思えたこともありました。しかし、先生が、マルクスやルカーチを評価されたのも、歴史意識という視点からであったと考えると納得がいきます。先生のご逝去とともに、日本における経済学史と社会思想史研究の源泉が遠のいていったように思われてなりません。

(八木紀一郎)

### 田村 秀夫 名誉会員

経済学史学会名誉会員・中央大学名誉教授の田村秀夫先生が、本年6月13日未明に逝去された（享年79才）。前立腺ガンを患われ、ご本人、ご家族ともにその病を直視され、8年間の闘病生活を送られた。学界

での活動は永く記憶されるであろう。本学会の常任幹事として運営に携わったかわら、社会思想史学会、日本イギリス哲学会、18世紀学会などの創立に貢献され、また、日本学術会議会員やイギリス哲学会の会長の職を務められた。

著作は、単著 24 冊、共著・編著 18 冊、計 40 数冊に及ぶ。現代の歴史家としては稀有といえる。戦争体験を契機にして、イギリス市民社会論への関心から、その研究ははじまる。まず、大英図書館所蔵の 280 点のマイクロ・フィルムを利用して、いわゆる「民衆のユートピア」を発掘し、『イギリス市民革命の思想的構造』、『イギリス革命とユートピア』を著した。さらに、「ユートピアの比較」から「千年王国論」へと研究領域を広げられたが、「民衆のユートピア」への視点から離れることはなかった。研究が順風に乗ったかに思われたとき、原史料の解読は、失明寸前にまで視力を悪化させ、生涯癒えることはなかった。研究方法は転換を迫られた。趣味とされた旅行と思想の歴史的風土とを結び付けた独自のジャンルを開拓することとなった。その成果は、NHK テレビをつうじて、広く市民、学校生徒につたえる啓蒙活動につながった。

(土方直史)

## 芳賀 守 会員

経済学史学会の古くからの会員であった芳賀守さんが本年 4 月亡くなられた。私は専攻分野が同じだったこともあって何十年もお付き合いをいただいていた。朴訥という表現が当たるのか、篤学という表現がふさわしいのか、そのお人柄は黙々として一途にテーマを追いかけるといふタイプだった。お生まれは 1915 年、福島のご出身で旧制の福島高商を卒業され、しばらく県立高校の教師をされたのち、徳山大学経済学部教授を経て千葉商科大学で経済学史・社会思想史を担当された。最初の著作は『イギリス革命期の社会・経済思想』（第三出版、1980 年）でベーコンからベラーズにいたる思想史を論じ、次に『イギリス社会思想史研究』（有斐閣、1986 年）でグレシャムとベーコンをあつかい、最後に『イギリス革命期の農業思想』（八潮社、1992 年）で、わが国ではほとんどとりあげられたことのないサミュエル・ハートリブの思想分析を果たされた。千葉商科大学を辞められてからは福島へ帰られ、お目にかかる機会もすくなくなりましたが、ときおりお手紙をいただき、お元気のこととと思っていた矢先の訃報であった。ご冥福を祈りたい。

(浜林正夫)

## 平井 俊彦 会員

2003 年 6 月 5 日早朝、本学会会員の平井俊彦氏が、急逝された。この 5 月にお見舞いした折りに、「自分はやりたい仕事はやったように思う」と淡々としておられた。退院し、自宅療養に切り替えた直後のご逝去であった。

先生は、京都大学で社会思想史の講座を担当し、後身の者の教育にあたられた。研究の上では、ルカーチの『歴史と階級意識』からはじめて、コルシュ『マルクス主義と哲学』などの主体的マルクス主義を研究された。後には、アドルノ、ホルクハイマーなどのフランクフルト学派の理論、とりわけ、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を研究された。いずれも時代の状況にマッチした理論を求め、紹介した。生活と理論とを相互浸透させるべきだというのが、先生の立場であった。これらの研究成果は『物象化とコミュニケーション』（1993）に収められている。

先生のもうひとつの研究領域は、イギリス初期経済思想であり、ロック、シャフツベリーなどのイギリス市民革命期の思想家を研究された。主著『ロックにおける人間と社会』は、ロックの人間観・社会観を中心にかれの経済思想を捉えており、ヘーゲルやルカーチから学んだ主体・客体の弁証法を啓蒙主義の経済思想研究に生かした独創的な研究であった。経済学史学会幹事として出口勇蔵元代表幹事を助けた。社会思想史学会の創設にかかわり、その代表幹事を務められた。戦後社会の民主主義かと西欧マルクス主義

の影響の増大を先導する仕事をされた。

(保住敏彦)

## 米田 康彦 会員

本学会（元）会員で、中央大学教授の米田康彦氏が、本年5月19日に逝去された。享年65歳であった。米田氏は、昨年6月30日、講演会の講師を務めた後、体調を崩して緊急入院し、検査の結果、肺癌から転移した脳腫瘍であることが判明した。その後、東大病院及び厚生年金病院で最先端の治療を受け、ご家族の看護の甲斐もあって容体はある程度まで改善したのであるが、遂に完治するには至らず、残念な結果となってしまった。

米田氏は、東大大学院を了えた後、1969年から86年までは福島大学に勤務し、86年4月からは中央大学に移って、90年代には経済学部長や理事の要職を務めた。代表的な著作としては『講座・資本論の研究第2巻』（青木書店）、『講座・今日の日本資本主義

第3巻』（大月書店）、『労働価値論とはなんであったのか—古典派とマルクス—』（創風社）、置塩・鶴田との共著『経済学』（大月書店）などがあり、比較的最近の論稿としては、「21世紀の経済学」（森岡・杉浦・八木編『21世紀の経済社会を構想する』桜井書店）、「価格/価値論ノート」（中央大学経済研究所編『現代資本主義と労働価値論』中央大学出版部）、

「20世紀経済学の回顧—価値論論争史」（『経済科学通信』第95号）がある。

本学会以外でも活躍され、経済理論学会では幹事・『年報』編集委員長、土地制度史学会では理事、経済学教育学会では、代表幹事を務められた。心からご冥福を祈りたい。

(鶴田満彦)

## 安保 則夫 会員

「安保さん入院」との一報が5月27日に届いた。学史学会初日の午前中、学内の会議で話をした直後であった。疲れを感じたものの、普段の安保さんであった。病名は急性白血病。長期療養を覚悟して、パソコンを持ち込み、ゼミ生へのメッセージを書いている途中で脳出血。手術の甲斐なく亡くなったのが6月1日。今なお信じられない。

イギリスと日本の労働運動史研究を研究課題とした安保さんは、注目すべき論文を多く書いたが、その中でも、労働運動と学内で起こった部落差別問題に端を発する部落差別研究との関係を扱った「労働運動（史）研究と部落差別問題」（1981）は、労働運動（史）研究と部落問題という実践的な課題との係りを最初に示すものである。その問題意識は、学位論文となった『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム—社会的差別形成史の研究—』（1986）や『日本近代化と部落問題』（1996）に掲載された論文に、また、ひょうご部落解放・人権研究所長や兵庫県在日外国人教育研究協議会会長などの実践に端的に示されている。被差別者への「熱い眼差し」こそ、彼の真骨頂であり、研究と実践に共通する姿勢である。このような研究・社会的実践に加えて、安保さんは関西学院大学の8番目の学部として新設された総合政策学部創設・完成の立役者の一人であり、その学部長を終えたところであった。加えて大学・法人の学内行政や生協においても多くの働きをした。八面六臂の活躍の中でさえ、その完成を目指していた最初研究テーマの労働運動史研究は、今や未完に終わってしまった。

(井上琢智)

## 野口 真 会員

今年4月2日に野口真会員が逝去された。当年54歳。野口君は、人いちばい闊達で、今年1月末の研究会でも、いつものようにマシガンのような議論の速射でわれわれに活気を与えてくれていた。その後、腸閉塞で入院手術し、3月半ばごろであったか、退院してリハビリにかかっているとの電話でひとしきり話

を交わし、近く会えるものと楽しみにしていた。鎌倉円覚寺での通夜、告別式には、代表幹事八木紀一郎会員、葬儀委員長をつとめられた内田弘会員をはじめ、本学会から多数の会員が故人を偲んで参席されていた。

野口君は本格的な学者らしい読書家で、古今内外の文献を丹念に読んでいた。その学風は、マルクス理論家、リカード、マルサスから現代の諸理論にいたる広い学史研究、および現代資本主義への鋭い関心の3面にわたる規模の大きな特色を有していた。著書『現代資本主義と有効需要の理論』（社会評論社、1990年）は、その学風を生かし、カレツキとケインズの有効需要の理論をマルクス経済学の体系からみて、現代資本主義分析への中間理論として位置づける試みを示したもので、知的感銘の深い作品である。その見識は、共編著『マルクスの逆襲』、『進化する資本主義』の企画と推進の過程でもよく発揮されていた。歴史の混迷が深まるなかで、その広範な研究関心を集約し、あいついで優れた著書がまとまると期待していた時期に、野口君が世を去ったことは、実に惜別の念にたえない。

(伊藤 誠)

## 編集後記

代表幹事の交替にともない、4月から学会事務局が京都大学大学院経済学研究科・経済学部の八木研究室に移りました。事務局員として齋藤隆子会員が私を助けてくれています。今回のニューズレターの作成は会員名簿の作成と並行して行われ、いずれも学協会サポートセンターの荒木節子さんの世話になっています。記して感謝します。

5月の同志社大学大会では、現代的な領域にまで学史研究を拡大しようとする若手研究者の活躍が目立ちました。私ののぞいた会場では、討論も活発でした。しかし、現代に近づけば近づくほど、学史・思想史研究のアイデンティティが問われるでしょう。英語でのフォーラムも実現しましたが、国際化と現代化のなかで、学史・思想史的研究を位置づけ直すことが必要になっていると思います。

(八木 紀一郎)

この4月から学会事務局の仕事をお手伝いすることになりました。慣れない仕事にミスも多いのですが、八木先生はじめ、回りのみなさまに助けられて何とかやっております。学会ニュース作成もさることながら、会員名簿の校正作業には手間取りました。

会員名簿の記載事項（住所、所属、研究テーマ、電話、e-mail アドレス）に変更があった方は、学会事務局までご連絡ください。

(齋藤 隆子)

経済学史学会ホームページを御覧下さい。

URL:<http://society.com.ehime-u.ac.jp/shet/shetj.html>

---

『経済学史学会ニュース』第22号

2003年8月31日発行

経済学史学会 代表幹事 八木紀一郎

事務局 〒606-8051 京都市左京区吉田本町

京都大学経済学部 八木研究室

TEL : 075-753-3427 FAX : 075-753-3492 (学部事務室)

E-mail : [yagi@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:yagi@econ.kyoto-u.ac.jp)

---